ISSN 1344-2937

全国患者図書サービス連絡会会報

Vol.24 No. 2
(通巻 No.82)
December 2018

目　　次

[講演要旨]
ヘルスリテラシーはこどものうちから:かわさき医療情報ネットワークの取り組み
川崎市立井田病院図書室　荒木亜紀子……1

知ることがだいじ！を子どもたちに　偕成社編集部　千葉　美香……4

[参加記]
全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して
聖隷佐倉市民病院図書室　山口直比古……13

全国患者図書サービス連絡会講演会参加記
青森県立保健大学附属図書館　村田　恵子……14

講演会参加記　気づき、学ぶことから豊かな人生へ　穂波　理枝……16

講演会に参加して
湘南藤沢徳洲会病院医学情報センター　伊藤　友香……18

[患者図書室訪問]
からだの図書室「くすのき」(東邦大学大橋病院) 訪問記
磯野　威……19

[投稿規定]……22

[編集後記]……22

＜講演要旨＞

ヘルスリテラシーはこどものうちから：かわさき医療情報ネットワークの取り組み

川崎市立井田病院図書室
荒　木　亜紀子

平成30年７月に、東邦大学（大森キャンパス）医学部にて、全国患者図書サービス連絡会平成30年度講演会が行われた。そこで私たちの市民団体「かわさき医療情報ネットワーク」の取り組みを紹介させていただいた。今回は報告として、講演の概要を記すこととする。

はじめに

筆者は川崎市立井田病院（以下　当院）で、病院図書室司書として働いて15年目になる。病院図書室とは文字通り病院にある図書室だが、患者向けの図書室のことではない。病院職員向けの図書室である。医学専門書ばかりが並ぶいわゆる専門図書館である。

その病院図書室に勤務して10年が経った2013年にちょうど新棟の立て替えがあった。サービスの対象を患者まで広げたいという願いがあった筆者は、がん患者のための相談窓口を開設したい看護師と、がんサロンを充実させたいがん相談員、それに緩和ケア医とともに患者用サロン兼図書室である「ほっとサロンいだ」の開設に関わることとなった。

がんサロン

「ほっとサロンいだ」では毎月たくさんの患者向けプログラムが行われている。メインのプログラムは月に２回行われている「がんサロン」である。第２木曜は14時から、第４木曜は18時からと、就労しながらがん治療している患者や家族に配慮した時間帯で開催している。

普段、自分が働いている病院図書室でサービスを提供している医師や看護師、メディカルスタッフの後ろには患者がいて、間接的に患者へもサービスを行っている、と意識はしていたのだが、がんサロンにて患者や家族の生の声を聞いて相当衝撃を受けた。

一人の人間としての苦悩や人生観、喜びや幸せとその言葉の重み…笑いや共感、沈黙、涙、答えのない問いかけ…どれも図書室にいるだけでは得られない深い経験であった。

そして驚くべきことに、がんになってはじめて自分のからだとこころに向き合わざるを得なくなり、玉石混交の情報に翻弄されている方がいかに多いか、思い知らされた。自分のからだやこころのことであるのに、それまではまったく「他人事」なのである。

がんサロンで私が学んだことは「歳をとってから、または病気になってからヘルスリテ

ラシーを習得したり、自分のからだやこころのことを［自分事］として捉えたりすることは難しいということだった。なかなか長年の自分の生き方、考え方を変えることは容易ではないのだ。

ならばもっと若く健康な子どものうちから自分のからだやこころのことを自分事として考え、ヘルスリテラシーを身につけるようなきっかけがあってもいいのではないかと考えるようになっていった。

かわさき医療情報ネットワークの設立

そこで、2014年２月に有志を集めて市民団体「かわさき医療情報ネットワーク」を立ち上げた。メンバーは私の考えに同調してくれた図書館司書、医療者、病院ボランティア、筆者のママ友仲間など市民が中心の団体である。

2014年の市民団体設立以来、以下のような子ども向け講座を行ってきた。

2014年度「親と子の絵本で学ぶ障がいと病気」
　第１回講座　保護者向け説明会
　第２回講座　親子ワークショップ

2015年度「こすぎこども大学医学部」
　第１回講座「しんぞうドッキドキ！」
　第２回講座「めざせ、キッズドクター！」
　第３回講座「ココロ探検隊」

2016年度「こすぎこども大学ふくし学部」
　第１回講座「おいしくたべよう！」
　第２回講座「おじいちゃんおばあちゃんにへんしん！」
　第３回講座「わすれちゃうってどういうこと？」

2017年度「こすぎこども大学赤ちゃん学部」
　第１回講座「赤ちゃんがうまれるまで」
　第２回講座「赤ちゃんがうまれてから」
　第３回講座「みんながくらしやすいまちって？」

2018年度「こすぎこども大学薬学部」
　第１回講座「Let’s　薬膳クッキング！
　第２回講座「薬剤師さんになろう！」
　第３回講座「ハンドクリーム実験室」

全講座とも３回連続講座として、段階を踏んで理解を深められるように工夫をした。また、対象を小学生（小学校３年生以下は保護者同伴）とし、定員を15〜20名として、伝え

たいことをシンプルに伝えられるようにした。

2014年の当団体立ち上げ当初はノウハウもなく、ただ自分たちの思いだけで企画運営した部分もあったが、5年間講座を開催して、参加の子どもたちの保護者や地域のキーパーソンなど様々な方々との意見交換もあり、講座自体がブラッシュアップしてきたと思える。

絵本を導入の教科書として用いて、そこから体験型のワークを行うやり方は司書がメンバーの中心となる、私たちの団体ならではの方法であり、参加の子どもたちの心にストレートに響く方法であると実感している。

おわりに

5年間の講座を通して、私たち、かわさき医療情報ネットワークが掲げる、

① 自尊感情をはぐくむとともに、他人を大切にする気持ちの育成をはかる。

② 医療を身近に感じることで、よりよい医療への関わり方を習得する。

③ 自分のからだやこころの働きを自分事としてとらえることができる。

④ 「生老病死」を考えるきっかけづくり

を講座を重ねるにつれ、 毎回少しずつではあるが達成できてきていると感じている。

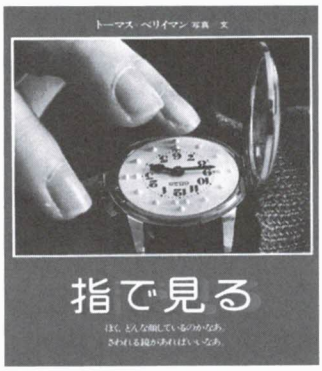
今後は自分と他人を大切にすること、これをこれからも継続して地域の課題として取り組んでいく必要があると考えている。継続することで徐々に子どもへのヘルスリテラシー教育が浸透していくものと考える。

願わくは子どもたちが大人になり、やがて老いた時、病気になった時に路頭に迷うことがありませんように。そして、そんな方を優しく支えてくれるような社会になっていますように。私たちかわさき医療情報ネットワークは「老いても病気になっても安心して暮らせるまちづくり」を目標に絵本を携え、細々ではあるが、これからの社会を担う子どもたちへ情報提供をこれからも行っていきたいと思う。

＜講演要旨＞

知ることがだいじ！ を子どもたちに

偕成社編集部
千　葉　美　香



偕成社は児童書の出版社です。創業80年を超えましたが、大切にしているジャンルとして、バリアフリーの本があります。そのきっかけは、1970年代に遡ります。 社として1974年から現在に至るまでイタリアのボローニャで開催される国際児童図書展に毎年ブースをもって参加しています。この児童図書展は、世界じゅうから子どもの本の出版社が集まり、自社の本を紹介し、他国の出版社と版権の売買をする場です。ある年、当時の社長（今村廣）は、イギリスの編集者から『車いすのレイチェル』『ぼく耳がきこえないんだ』という小さな絵本のデッサンを見せられ、こんなことを聞きました。

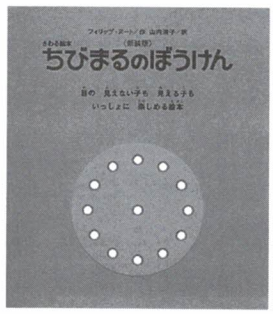
「私は子どもたちに、もっともっと障害者のことを理解してほしいと思うのです。それは障害者のためというよりも、子どもたちが、人生をよりよく生きるためにはどうすればよいか、ということを考えてもらうためです。そんなに売れるとは思いませんが、長年子どもの本に関わってきた人間として、こういう本を出す義務があるのではないかと考えました。」

その話に大きく心を動かされた社長は、自分の会社でも「障害者を理解する子どもの本」の出版を進めることを決意したのです。

２年後、スウェーデンのカメラマン、トーマス・ベリィマン氏のフォト・ドキュメント『指で見る』という作品に出会い衝撃を受け、この絵本が「障害者を理解する子どもの本」の第一冊目の出版となりました。1977年のことです。

以降数10年にわたって、翻訳や創作の、絵本、読みものといったあらゆるジャンルで、かなり多くの障害者を理解する子どもの本を刊行しました。いまでもロングセラーを続けている作品に『わたしたちのトビアス』『わたしの妹は耳がきこえません』『さっちゃんのまほうのて』、障害のある著者による作品『わたしいややねん』『フー子とママのふたり』『ボスがきた』、さらに、隆起印刷を施した目の見えない子と見える子が読書を共有できる画期的なさわる絵本『これ、なあに？』『ちびまるのぼうけん』などがあります。みんな1980年代までの作品です。そしてこの期間ほど多くはありませんが、その後も同様な本を出し続けています。

若い頃にそれらの本作りの現場を見てきた私ですが、なかなか自分自身が取り組むには、ハードルが高い気がしていました。でも、10数年前から、手がけるようになりました。いくつか具体的に本をご紹介しながら、すこしエピソードをお話したいと思います。



『車いすのレイチェル』『ぼく耳がきこえないんだ』(ブルーム・文　チャールストン・絵　邑田　晶子・訳)
『指で見る』(ベリイマン・写真／文　ビヤネール多美子・訳)
『わたちたちのトビアス』(ズドベドリ・編　山内清子・訳)
『わたしの妹は耳がきこえません』(ピーターソン・作　レイ・絵　土井美代子・訳)
『さっちゃんのまほうのて』(たばたせいいち、先天性四肢障害父母の会、のべあきこ、しざわきよこ・共同制作)
『わたしいややねん』(吉村敬子・文　松下香住・絵)
『盲導犬ものがたり　フー子とママのふたり』(福沢美和・著　安徳美和子・絵)
『ボスがきた』(福井達雨・編　竹内雅輝・絵　馬嶋克美・文字)
『これ、なあに？』(イエンセンとハラー・作　きくしまいくえ・訳)
『ちびまるのぼうけん』(ヌート・作　山内清子・訳)

◎『アイちゃんのいる教室』

『アイちゃんのいる教室　３年１組』

『アイちゃんのいる教室　６年１組にじ色クラス』

（高倉正樹・文／写真）

これは、読売新聞記者の高倉さんから持ち込まれた企画でした。当時仙台の東北支局にいらした高倉さんが、仙台版で連載した記事の単行本化です。

高倉さんは出生前検診のことを追っていた記者でしたが、それにはダウン症が深く関わってきます。ダウン症の子に会ったことがなかったので、会いたいと思って紹介してもらったのがアイちゃんでした。アイちゃんは、仙台の太白小学校の普通学級に通っていました。取材していくうちに、アイちゃんを取りまくクラスの子どもたちと先生をずっと追いたくなり、結局６年生の卒業まで取材し続けました。理解のあった学校や父兄の方たちおかげでもあります。

生徒数が減り、２年生からは１学年１クラスになりずっと同じメンバーで過ごした、という点では、少し特別かもしれません。先生は子どもたちに一度もアイちゃんがダウン症だと話したことはありませんでした。

みんなより体が小さくて、力もなく弱かったアイちゃんにみんなが自然に手をさしのべていた低学年のとき。だんだん大きくなってくるにしたがって、差も開いてきて、自分のことに精一杯になってくる子どもたち。そんななか、「アイちゃんだけに優しくするのはなんでなの？　こっちにも困っている子がいるよ」と容赦なく子どもたちを叱る先生。クラスで「仲間ってなんだろう？」と考え続けた３年生の終わりに子どもたちが出した結論は「『仲間になる』って、いっしょにすごして、その人のことを知ることなのかもしれない」そんなようすが、生き生きと語られている写真絵本です。

特に高学年になるとクラス全体がぎすぎすした時期もあり、取材を続けても本になんてできないかもしれないと高倉さんは悩みましたが、それでも、決してドラマチックに本をつくりあげるのではなく、ありのままに、という思いをもってずっと子どもたちを見続けました。３作目は産みの苦しみだったとのことでしたが、最後にクラスの子全員にインタビュー（これは圧巻！）をとることができて、とうとう本は完成しました。

子どもたちの力をいかに信じるべきか、ということと、先生である大人の手のさしのべ方の重要性を、私はこのシリーズの本作りを進めていく中で強く感じました。

アイちゃんにはお母さんが毎年、このまま普通学級にいくか、特別支援にいくかをたずねたそうです。そのたびに「このままがいい」といい続けて、みんなと一緒に卒業しました。中学では特別支援学校にいっていますが、ダウン症の子を追ったのではなく、１つのクラスの６年間を追ったことで、「教育」についても深く考えさせられました。

◎「アスペルガーの心」
シリーズ
（フワリ・作／絵）

これも、フワリちゃん（ペンネーム）のお母さんからの持ち込み原稿でした。アスペルガー症候群の娘（フワリちゃん）が３年生のときに、検査によりその告知を受け、４年生のときに自己分析をまとめてアスペルガーを理解してもらう絵本にした、というものでした。送られてきたスケッチブックを拝見して、そのインパクトの強さに心をぐっと動かされました。

その後、フワリちゃん親子にお会いしにいき（フワリちゃんは中学生になっていました）、絵が好きでいままでにいっぱい描かれていたという作品をたくさん見せていただき、２冊、そして数年たってもう１冊、計３作を本にさせていただきました。

１作目は、アスペルガー症候群とは、こういったものだということを具体的に説明したもの、２作目はアスペルガーの症状の一つである「パニック」についてを、その原因、種類、対応の仕方などについてわかりやすく記したもの、３作目は、フワリちゃんが大好きだった療育の先生に対してのあふれんばかりの愛情を語ったものです。これはフワリちゃんにとって初めての他者理解でもあったようです。

本の製作に入ったときフワリちゃんから、この本は自分と同じようなアスペルガー症候群の子にも読んでもらいたいので、そういう人たちが「読みやすいもの」にしてほしい、という要望がありました。それは本のデザインを進めていくときに、少しずつ明らかになっていきました。

- 文字の色は、白い用紙に黒だと、まぶしいので黒より少し柔らかい色にしてほしい。（セピア色にしました）
- 文字の書体は、明朝体ではなく、柔らかいゴシック系にしてほしい。（丸ゴシックにしました）
- 文字と文字の間をすこしずつあけてほしい。くっついていると読みにくい。
- 見開いたページに絵と文字がいろんなところにあると、どこを読めばいいのかわかりにくいので、文字のバックに薄い色をつけてほしい。（ピンク色の上に文字をのせました）

などなど。本として楽しく読んでもらいたいので、デザイナーさんはくふうをしてくださいます。そのデザインと、このフワリちゃんのいう「わかりやすさ」をギリギリすりあわせ、デザイナーの方にも理解していただき、結果フワリちゃんがとても喜んでくれる仕上がりとなりました。

最初の２冊で信頼を得たので、３冊めのときは「同じデザイナーのタカハシさんなら、おまかせします！」と、いってくれました。装丁は、フワリちゃんの絵を使って大胆にデザインしているので、これも信頼を得なくては難しかったと思いますが、１、２作目を進

めて行く途中で、フワリちゃんはタカハシさんのことが大好きになったので、あとは問題がありませんでした。

この本を出した後、ある小学校の先生からお手紙をいただきました。それには、今年転校してしまった生徒がいるが、その子をみていた昨年この本を読んでいたら、もっともっと対応のしかたがあったのではないかと思ったと綴られていました。こんなことがいやだったんだ、こんな状態のときには、こうすればよかったんだ、と思いあたることがいろいろあったそうです。

◎『いっぽんのせんとマヌエル』　（マリア・ホセ・フェラーダ・作　パトリシオ・メナ・絵　星野由美・訳）

チリで生まれた絵本です。スペイン語で書かれたこの絵本を翻訳者の星野由美さんから紹介していただいたとき、絵本の背景にあったストーリーも大変興味深いものでしたが、絵本そのものも明解で、チャーミングな絵だなあと思いました。

この絵本は、著者のマリアさんが、線の大好きな自閉症の男の子マヌエルと知り合ったことによって生まれました。マリアさんは、詩人であり、作家であり、ジャーナリストでもあります。知的障害のある子どもの本作りを学ぶために、スペインのバルセロナにいたとき、障害者施設で子どもたちの世話をする仕事を手伝っていました。そのときに、障害のある子どもたちが豊かな暮らしをおくるため必要なことは何かということを多く学んだといいます。そして偶然ネット見つけた動画、それは2年前に自閉症と診断された子とその母親が一緒に、ピクトグラム（絵文字）のついた絵本を読んでいる場面でした。

その子がマヌエルでした。マリアさんはその母親にすぐに連絡をとりました。本が大好きだった母親のオルガさんでしたが、マヌエルが自閉症とわかったときには、彼と一緒に絵本を楽しむなどという夢はとても叶わないと思っていたそうです。でも、忍耐と努力と愛情があれば、閉ざされたと思った世界も開かれることがあると信じて、療育の先生とともにマヌエルとのコミュニケーションを少しずつつくりあげ、絵本を楽しめるようにまでなったとのことでした。「すべての子どもたちには本を楽しむ権利がある」このことをマリアさんは、マヌエル親子から学んだとおっしゃっていました。

ピクトグラムは、単語の意味をシンプルな絵で表現した絵文字です。これを並べて文章をつくることもできます。特に自閉症の子どもたちを助けています。耳で聞くより目で見たことのほうが理解しやすいからです。「はみがきしましょう」というより、はみがきをし

ている絵を見せてあげるほうがよく伝わったりするとも聞きました。

その後マリアさんは線が好きだというマヌエルのために絵本をつくろうと考えたのです。主に自閉症の子など読者対象に関わる人々からさまざまな意見をとりいれ、画家のパトリシオさんとともに、この絵本を完成させたのですが、残念ながらチリで出版された本にはピクトグラムをつけることができず、ネット上での公開だけに限られていました。その公開されたピクトグラム版を、星野さんが知らせてくださり、今回日本で翻訳本を出版するにあたっては、ピクトグラムをつけた状態で出しましょうということになりました。日本語にあわせたピクトグラムにするために監修の先生のチェックを受けながら、パトリシオさんに修正をお願いしたり、新しい絵を描いていただいたりもしました。

ピクトグラムがついた絵本というのは、日本ではまだあまりありません。LLブック（やさしく読める本）というカテゴリーの中で、ピクトグラムがついている本はありますがもっと大きい子が対象のものが多いです。絵本のなかにピクトグラムがいっぱいあると、絵の種類がたくさんあって、かえってわかりにくくなるという懸念もありますので、何にでもつければいいというものでもないでしょう。でもピクトグラムつきの絵本がもっと増えるといいなと思います。このマヌエルの絵本の場合、シンプルなストーリーであること、またピクトグラムが、絵本の画家であるパトリシオさん自身の絵によるために、絵本の絵とうまくマッチしていることが特徴だと思います。

◎「手話で話そう」シリーズ
（くせさなえ・作／絵）

手話の本というと、どうしても手話を覚えるためのテキストというイメージになってしまうことが多いです。でももっと楽しく手話に親しんでもらえる本ができないかと思っていたところ、絵本作家のくせさんから、甥っ子が耳が聞こえないので、手話の絵本をつくりたいと思っているとうかがいました。２人の手話絵本に対する思いが一致したので、始めたシリーズです。

この絵本の製作にあたっては、ろう学校の先生と、生まれつき耳がきこえなくて、Eテレの手話の番組に出演してらした早瀬憲太郎さんに、ご協力をいただきました。

絵本の絵を見ながら、一緒に手を動かしてみると自然と手話ができる、絵本もストーリーが進んでいくので、それを止めないように、本文に手話の説明は（動きを表す矢印も）いれない、ということにしました。デザイナーさんも手話ができる方で、その方針に理解

を示してくださいました。（もちろん最後のページにまとめて手話の説明があります）

手話を絵で表すのはなかなか難しいので、何度も絵を描き直してくださったりと、くせさんは大変だったのですが、できあがった本を見て早瀬さんたちも「テキストっぽくない手話の絵本」をとても喜んでくださいました。

話し方が人それぞれ違うように、いろんな方の手話を見ていると、みんなとても特徴があります。手話は、英語や中国語と同じように、一つの言語だ、ということを子どもたちに知ってもらうことはだいじだと思います。私たちが外国旅行をして現地の方と交流したとき「アリガト」なんて一言でも言ってもらえるとうれしいのと同じで、手話が母語である子どもたちに、一言でも手話で話しかけることができたらぐっと距離が縮まるのではないかと思うのです。ですから、耳の聞こえる子に手話に親しんでもらえるよう、手話で絵本を楽しむ映像を作る、ということにも、いま取り組んでいます。

◎　点字つきさわる絵本

『はらぺこあおむし』（カール・作　もりひさし・訳）
『ノンタンじどうしゃぶっぶー』（キヨノサチコ・作／絵）
『じゃあじゃあびりびり』（まついのりこ・作／絵）

目の見えない人が絵本を読むなんて、思いもよらないという人は多いでしょう。でも、大阪にある「てんやく絵本ふれあい文庫」を運営なさる岩田美津子さんは生まれつき目が見えない方で、２人の見えるお子さんに、絵本をたくさん読み聞かせてきました。ご自分のお子さんに絵本を読んであげたいという思いは、まわりの友人だちを動かしました。手作りで市販の絵本に点字をつけ、絵の部分にも透明の塩ビシートを切って貼付けるという、さわって読める点訳絵本を作ってくれたのです。そしてたくさんの点訳絵本ができたので、それは全国に貸し出すという文庫を開くことにつながりました。

けれどもこの文庫には、多くの本がありますが、全てボランティアの方による手作り本です。岩田さんは、こういった点字つきのさわる絵本の市販本がもっと増えてほしいと、いくつかの出版社に呼びかけをなさったのです。それをきっかけに「点字つきさわる絵本の出版と普及を考える会」という会ができ、15年以上になります。

点字つきの絵本は、隆起印刷により、点字と絵の部分を隆起させたものです。製作にあたっては、コストや技術においてさまざまなハードルがあります。しかもそれほど売れるものではない。年２回の定例会で、出版社の垣根を超えて情報を共有し、お互い協力し合

う事で点数を増やしてきました。この15年の間に新たに刊行されたものは、20点近くあります。地味な本なので、同時刊行を企画したり、共同でリストを作ったりもしています。

インドで企画製作の『点字つきさわる絵本　はらぺこあおむし』の日本版を刊行したときときのことです。全国の盲支援学校に１冊ずつ寄贈しました。そのときの１通の子どもからのお礼状（点字でした）には胸が熱くなりました。「このおはなしはおとなりの小学校のお友だ゛ちが゛ハ゜ネルシアターで゛発表しているのを聞いて知っていました。楽しいお話で゛す。で゛もお話を読んだ゛のは初めてで゛、点字で゛自分で゛読んだ゛のが゛とても楽しかったで゛す。触ってざ゛らざ゛らとか、とげ゛とげ゛とか、つるつるとか、もこもことか、ぎ゛ざ゛ぎ゛ざ゛とか、小さいなとか、で゛っかいなとか、いろんな感じ゛が゛おもしろかったで゛す。学校の図書室にはこんな本はちょっとしかありません。だ゛からとってもうれしかったで゛す。ろう学校のお友だ゛ちにも見せてあげ゛ます。この本をが゛んば゛って作ってくれてありが゛とうご゛ざ゛います。大切にします。」

＊てんやく絵本ふれあい文庫　http://tenyaku-ehon.la.coocan.jp

＊点字つきさわる絵本の出版と普及を考える会　http://www.tenji.shogakukan.co.jp

◎『ノンタンがんばるもん』と「ノンタンけんさがんばるもん」（キヨノサチコ・作／絵）

40年以上ロングセラーを続ける絵本「ノンタン」シリーズ。子どもたちと等身大のノンタンは、人気のキャラクターです。『ノンタンがんばるもん』という作品があります。これは耳をけがをしたノンタンが、治療する手術のための注射が怖くて最初は逃げ出してしまうけれど、友だちに励まされて勇気を出し、注射をがんばって怪我が治るといったストーリーです。刊行後、「この絵本を読んで、予防注射を泣かずにできました」「これを抱えて入院しました」といった愛読者カードがいっぱい届くようになりました。

あるとき、横浜市立大学附属病院の看護師さんたちが、この絵本をもって会社にやってこられました。この本で子どもたちは、とても励まされています。ついては「心臓カテーテル検査」という検査をするときに、子どもたちにプレパレーションをするためのツールを、ノンタンのキャラクターを使ってできないでしょうか、という相談でした。うかがうと、この検査は検査後24時間の安静を強いられるため、じっとしているのが苦手な子どもたちにそれを理解、我慢してもらうことが難しく、安静を保つため薬を使うこともあるとのこと。ノンタンの絵ならば、子どもたちにも理解をしてもらいやすいのではと思ったとのことでした。事情を聞いてノンタンの作者のキヨノさんにお話すると快諾。「そのための絵を描きましょう」と言ってくださいました。なにより説明のためにお送りした、実際

子どもたちが検査のときに身につける検査着をごらんになって、「こんなに小さな子が？！」と心を動かされたと、後におっしゃっていました。

看護師さんたちと話し合って、検査説明をするための６枚の絵ができあがりました。これは、ノンタンが検査する子を励ます絵ではなく、ノンタン自身が検査のために入院して、検査をし、１泊の後「けんさがんばった！」と喜ぶ絵でした。もともと、ノンタンはヒーローではない、子どもたちと等身大のキャラクターという意味が大きかったと思います。

できあがったのは12年前。残念なことにこの絵を描かれた後、キヨノさんはご病気になり１年半の闘病生活の後、逝去されました。描かれるときは難しいとおっしゃって、いろんな資料を送っていただいた点滴の器具の絵のことを、闘病中は「いまならじょうずに描けるわよ」と笑っていらしたのが心に遺っています。

当初、ご要望のある病院にのみお送りしていたのですが、最近は、個人の方で、こんど心臓カテーテル検査を受けるので、という親御さんからの申し込みも増えてきました。赤ちゃんのころはわからないから、大丈夫だったのですが、３歳になってわかるようになってきたので検査をいやがります、ノンタンが大好きなのでぜひ見せてあげたい、とか、いつも弟が検査をしているお姉ちゃんに理解してもらいたいので、見せてあげたい、というお話もありました。

このようなノンタンのエピソードを思うと、絵本が子どもたちを励ます力になるということを、思わずにいられません。だからこそバリアフリーに関連する本に携わるときに思ったのは、先入観のない子ども時代にいろんなことを知ってほしいということ。知っていれば、子どもたちの力はどこでどのような形で開花するかわからないのです。いつも「知ることがだいじ！を子どもたちに」それを思って、本を作っています。同じような思いで本作りに関わっている人はたくさんいると思います。ここにあげたのはごく一握りの本ですが、他にも斜視がテーマになっていたり、ALSを発症した著者が言葉の力について語る本や、ちょっと違ったニュアンスですが、養子がテーマの絵本もあります。そのような本を、ぜひたくさん子どもたちに届けていただきたい、みなさんにはお願いしたいと思います。

「本は私たちに影響を与えます。私たちは、おたがいが人間どうしとして出会えるような本を求めています。私たちの中には、障害をもっている人も、そうでない人もいます。本の中でも実際の生活の中でも、おたがいどうし、知りあうことが大切です。」

（『本は友だち』
トーディス・ウーリアセーター／著　藤田雅子・乾侑美子／訳　偕成社刊より）

＊偕成社バリアフリーの本　https://www.kaiseisha.co.jp/accessible

＜参加記＞

全国患者図書サービス連絡会講演会に参加して

聖隷佐倉市民病院図書室
山　口　直比古

久しぶりに講演会に参加させていただきました。今回は主に子どもさんに対するリテラシー教育や、病気について知るための絵本を中心としたお話しでした。

お話しを聞いていてまず思い出したのは“You and Leukemia”という本の事でした。この本は絵本という括りには入れにくいかもしれませんが、数多くのイラスト（それもマンガチックな）が使われており、学術的な書籍とは異なりますので、そのタイトルから大学の医学部図書館に紛れ込んできたのかもしれません。ある書評によると、子ども向けに「君の病気はこんな病気だよ」、と説明したり「この先どんな具合に治療などが進むのだよ」、ということを書いてある本としては最初のものである、というようなことが書いてあったと思います。著者はたしか女子学生さんだったのではないかと記憶しております。多くの方がご存じのように、子どもの癌で一番多いのが白血病です。骨髄移植による拒絶反応を防ぐため免疫抑制剤を使用し、そのため感染しやすくなるので感染予防のために無菌室に入り、抗がん剤で頭髪が抜け、というような（本書が出版された当時1970～80年代の話で、現在は化学療法が中心でしょうか）場面に子どもたちが置かれ、病気と闘う場面が想像できます。この本は、そのような子供たちにたくさんの勇気を与えたのではないかと思います。幸いにこの本は後に日本語に翻訳され「君と白血病」というタイトルで、今でも多くの患者図書室や公共図書館にあるのではないかと思います。子どもに体や病気についてしってもらう努力を続けている川崎医療情報ネットワークのみなさまには、こころから敬意を表したいと思います。なお、お話しくださった荒木亜紀子さんは、今年10月に東京で開催される全国図書館大会の分科会でも、川崎医療情報ネットワークの活動の紹介をされるようですので、今回の講演を聞き逃された方は、ぜひともそちらへ参加されてはいかがでしょうか。

千葉さんのお話しは、昨年夏に初孫が生まれておじいちゃんとなった身としては、本当にありがたいお話しでした。ああ、こんな本があるのか、と大変に心強い思いです。もちろんかわいい孫には健康に育ってほしいのですが、同時に病気を抱えたお友達への理解と、共生してゆくリテラシーを身に付けてほしいと願っています。出版社さんのご努力にも敬意を表したいと思います。

最後に一つ。荒木さんのお話しの中に「あべひろし」さんのお名前が出て驚きました。私が旭川医科大学の図書館にいたころ、彼は旭山動物園（まだ今のような人気はなく、さびれた田舎の動物園でしたが、子どもをつれてよく行きました）の飼育係でした。私は趣味で音楽をやっていたのですが、その繋がりで（友達の友達は友達だ）何度かお会いし、旭川市内で何度か開催していた個展にもよく行きました。そのころはあべさんの作品は版画が中心で、今でも我が家の玄関にはあべさんの版画が飾られています（当然ナンバー入り）。私の方が早くに旭川を離れましたが、その後あべさんが絵本作家としてご活躍なのは知っておりました。そんなお話しも聞けて、大変有意義な午後でした。

＜参加記＞

全国患者図書サービス連絡会講演会参加記

青森県立保健大学附属図書館
村　田　恵　子

講演１「ヘルスリテラシーはこどものうちから：かわさき医療情報ネットワークの取り組み」

講師の荒木先生は、ご自身の勤務する川崎市立井田病院にて医師、看護師とともに、患者が診察室以外で自由に語れる場の設置を病院へ働きかけ、「ほっとサロンいだ」を開設した。

ここでは病気に関する本や様々な情報、自分の生き方に関する本、闘病記などをそろえ、患者のこころに寄り添うサポートを行っている。また、月２回「がんサロン」を開催し、がん患者やその家族がお茶を囲みながら悩みや相談を語り合う場としているそうである。

このサロンを運営する中で、講師は、自身の病気を受け入れることができず、様々な情報に翻弄され、立ち直れない患者を目の当たりにしてきた。年齢を重ねてからのヘルスリテラシー習得の難しさとともに、子どものうちからの学びの大切さに気づき、「かわさき医療情報ネットワーク」の結成に至ったという。

この団体では「こすぎこども大学」を毎年開催し、子どもたちのヘルスリテラシーを育む場としている。「地域の課題は地域で解決」をモットーに、講師には医師だけでなく、作業療法士、助産師、管理栄養士、ピープルデザイン研究所など、メンバーの人脈を頼りに地域の様々なジャンルから招聘しているという。

この「地域からの講師」というのが、受講者にとってみるとより問題を身近に感じることができ、非常に重要であると思う。例えば青森であれば、津軽弁のイントネーションを交えての講座は、子どもたちの心により深く届くのではないだろうか。この講座を受講後、将来の夢は助産師と語る子どもがいたことも頷ける。

障害のある者とない者が共に学ぶ仕組みの提唱やインフォームドコンセントが一般的となってきている現在、障害や病気について正しく知ることは、時代の流れでもある。

そのような中で、児童書の持つ特徴（①絵が主体的　②内容が簡潔で正確、価格が安い　③公共･学校図書館で扱いやすい　④優しい、怖くないイメージ　⑤子どもも大人も使用できる　⑥押しつけがましくない）は、ヘルスリテラシーにとっても有効であるという。

「正しく知る」とともに「こころを支える」ことの大切さと、必要な人に必要な情報を届ける役目の重要さを訴え、講演は終了した。

病院図書室の仕事を通し、社会にとって今何が必要か、何が足りていないか、自分には何ができるかを主体的に考え、次のステップへと活動を進めていく荒木先生の行動力に感銘を受けた。

講演２「知ることがだいじ！　を子どもたちに」

講師である千葉先生の勤務する偕成社は、『はらぺこあおむし』、『からすのパンやさん』、

『ノンタン』等を世に送り出した出版社であり、日本において、バリアフリー図書を出版した先駆けでもあるという。

これは世界的絵本展であるボローニャブックフェアに毎年出向いていた社長が、北欧ではバリアフリー図書が数多く出版されていることを知ったのが、きっかけだったそうである。

同社については、私自身も障害者に関する児童書の出版が多い印象を持っていたが、これが発端であったことは知らなかった。社長は代替わりをしたそうだが、現在も初代の理念のもとに出版が続けられていることは尊いと思った。

ある時、同社に病院の看護師から、長時間にわたる心臓カテーテルの検査について子どもに説明をするのに、ノンタンの絵を借りたいとの申し出があったという。そこで作者のキヨノサチコさんに相談したところ、そのために絵を描くことを快諾し、『けんさがんばるもん』が誕生した。現在、このカードは、送料のみで全国の病院に無料配布を行い、長く辛い検査に耐える子どもたちのために寄り添っている。

また、ノンタンの図柄を使ったヘルプカード（緊急時や災害時に必要な情報を伝えるため、持ち主の緊急連絡先や通院先、病気や障害等の情報を記入）の作成にも、協力しているとのことであった。

前段の講演でも取り上げられていたが、図書というものは、先入観のない子ども時代から、この世界には様々な人がいるという事を伝えるためにも有効である。

ノンタンの妹・タータンは聴覚障害の設定であるが、本の中においては「耳が聞こえない」といった直接の表現は出てこない。それでも読者の子どもたちは、すんなりタータンの事情を理解し、仲間として受け入れることができている。

その昔、図書館界ではノンタン本は良書とすべきか否かで議論が交わされたこともあったと記憶するが、子どもたちにとってはいつでもかけがえのない、大好きなともだちであることがよくわかり、感慨深かった。実にノンタンの奥深さに気付かされた講演であった。

一方、出版側からすると、どうやってバリアフリー図書を当事者へ届けるかが問題だそうである。学校や公共図書館では、絵本や読み物としてひとくくりにされ、タイトル順や著者順で配架されることも多く、数多くの本にまぎれ埋もれてしまう。これをどうやって際立たせ、本当に必要とする子どもたちの手に渡すかは、図書館側の課題であろう。現在も分類付与やテーマ展示などでグループ化することはできるが、とにかく読み手が図書館へ来なければ、その図書の存在も知ることはない。いかに図書館側が広く子どもたちへ働きかけていくかが、重要であると思う。

この２講演を通して、ヘルスリテラシーと聞くと病気の予防のみを考えがちだが、病気そのものや現在、病気である人への理解についても深め、寄り添う心を持つことが大切であると実感した。成人してからの生活習慣やものの考え方の変更は難しいが、子どもには計り知れない心の柔軟性があり、大きな力を秘めている。未来を担う子どもたちへの取り組みに力を入れることは重要であり、それができれば社会はみんなにとってよりよいものに変わっていくかもしれない。

＜参加記＞

講演会参加記　気づき、学ぶことから豊かな人生へ

穂　波　理　枝

「全国患者図書サービス連絡会」講演会への参加も回数を重ねてまいりました。「会」との出会いから今に至るまで参加が継続できたのは、自己の思いの根幹に沿うものが「会」にあったからと考えています。今回の講演会参加は私にとってはその根幹を、また長く関わりを続けてきた子どもの本（絵本）について再確認する機会をいただきました。

近年、市民が自身のためや家族のために健康や医学関係の図書・雑誌を購入したり、公共図書館で調べたり資料を借りることが増えています。また、公民館や病院の公開講座に参加したり、テレビやラジオの健康番組を視聴するなど、さまざまな方法で医療健康情報を求める動きも高まっています。

さらに、教育現場にも新たな健康教育プログラム ― がん教育、くすりの教育など ― が入って来ています。環境・福祉・健康と新しい分野のカリキュラムが総合的な学習の時間などに導入され、教員が関わらねばならないものが次々にやって来ているようです。

上記の分野の外部講師やボランティアとして、私も学校の子どもたちや先生方と関わってきました。その中でいろいろなことに気づきました。健康格差が子どもにも及んでいることもそのうちの一つです。子ども自身が健康についてまた病気について知ることは、自身が生きていくうえでとても大切なことと考えます。子どもたちにとって「自分のからだを知ること」「自分のこころを知ること」は、自分を大切にすることそして他人を大切にすることに繋がっていくのだろうと思うからです。

大人の「生きる」を支えるもの・場・方法は、自身の力で見出すことが可能です（最近はセルフメディケーションが注目されつつあるようです）が、子どもたちはどこで、どのように「からだを知る」「こころを知る」ことができるのだろうか。子どもの「生きる」を支えるその答えを、講演の中に見出すことができました。

講演「ヘルスリテラシーはこどものうちから:かわさき医療情報ネットワークの取り組み」では、病院図書室に勤務されている荒木氏が、「がんサロン」との関わりからの気づきを子どもたちのヘルスリテラシーに繋げていくという実践をお話しいただきました。

地域の問題は地域で解決をモットーに、市民団体を立ち上げ自主企画事業「こすぎこども大学」へと作り上げていくという内容でした。地域の医療関係者・薬剤師・栄養士・司書・ボランティア・保護者との連携はすばらしく、立ち上げてから継続的な実施に繋がっています。その内容は楽しく、わかりやすく、次回開催を期待する大勢の子どもたちの様子が伝わってきました。

子どもたちがいろいろな立場の大人たちと会話し一緒に体験することは、自分を支え見てくれている大人が学校や家庭以外の場にいることを実感することになると思います。ま

た、親以外のさまざまな仕事に就いている大人との出会いが子どもたちにもたらす意味はとても深いです。波紋が広がるように、大人同士のつながりがさらに大きなつながりになり、子どもの心を動かし子ども自身の次の一歩（学びや将来像）に結びつくきっかけ作りを果たしていると思いました。地域コミュニティと教育の理想的な在り方が実践から見えてきます。

偕成社の編集者千葉氏の講演「知ることがだいじ！を子どもたちに」では子どもの本（絵本）は子どもばかりでなく、大人にもその力を発揮することを教示いただきました。また、その本の力は、作り手の力でもあることを再認識しました。

『子どもの「からだ」と「こころ」、「さまざまな障がい」について理解を深める本のリスト』（通称:バリアフリーの本リスト）には、子どもたちにとっても、今後医療職に就く学生にとっても、医療職・福祉職にある者にとっても、自己理解、患者理解、当事者理解につながる本が紹介されています。

本を読むことによって、気づきや関心の高まりが生まれ自分ができることは……という子どもたちの変容を小・中学校でみることが何度もありました。そして、知ったこと（学び）が、やがて自身を支えるものとなっていくことに子どもたちは気づいていました。

障害者差別解消法が2016年に施行され、あらゆるところで合理的配慮が求められています。社会の多様なニーズを知り、対応する（支援する）力をもつことは大人でも容易なことではありません。少しずつ少しずつ知り、理解し、寄り添い一緒に歩めるまでには時間を要します。また個人の姿勢も問われます。しかし、子どもたちは大人でもなかなかできないことをスムーズに行動に繋げる力を持っています。その力を伸長することができるように子どもたちに関わらねばと思います。

図書館利用者へ本の作り手の意を伝えることを意図した展示をこれからも続けたい。また、利用者が読み残してきた、出会えずに来た本と出会う場を作り続けたい。そして、医療系の大学図書館に絵本や子どもの本を所蔵する意味をしっかり伝えたい。

私自身、地域の社会福祉協議会・公共図書館・郷土館・公民館・保健センター・老人ホームと関わり、視覚障がい者ガイドボランティア、音訳ボランティア、障がい児母子との交流、学校での福祉体験教育、レクレーションボランティア、特別支援学校ボランティアや図書館ボランティアなどを通し、地域の方々とさまざまな交流をしてきています。

関わる中での気づきはそれぞれの分野のより専門的な学びに繋がってきました。この気づきや学びが、現在とても有用なものになっていることを実感しています。講演は、効率性、利便性が優先されることが多い現代社会への静かな警鐘にきこえた時間でした。

国際子ども図書館で催されている「世界のバリアフリー児童図書展」に出かけようと思います。障がいのある子どもたちの読書を支援する図書に出会うために。

＜参加記＞

講演会に参加して

湘南藤沢徳洲会病院　医学情報センター
伊　藤　友　香

今回の講演では、子どもの頃から病気や健康に関する興味を持つことの大切さや、情報リテラシーを育てることの重要さと難しさなど、現場で活躍されていらっしゃる方の「生の声」をお聞きすることができました。

病院図書館司書としても活躍されている荒木亜紀子氏は、病院内のがんサロンの運営にも携わっていらっしゃいます。その経験から、子どものうちからのヘルスリテラシーが大切だ、と心から思われたそうです。そして、かわさき医療情報ネットワークを立ち上げ「老いても病気になっても安心して暮らせるまちづくり」を目標に活動を始めます。

子どもを対象とした内容ということですが、いやいや、大人だって興味のあるものばかりです。今年度行う予定の「薬学部」では、薬膳料理の調理・薬剤師体験・ハンドクリームの作成をするそうで、「大人」の私も参加したいラインナップです。導入部分では、必ず絵本の読み聞かせをされるそうで、大人だって読み聞かせは大好きです。みなさんも聞きたいと思いませんか？私が子どもの頃、こんな素敵な大学が近くあったなら…と羨ましくなってしまいました。

千葉美香氏は、子どものからだ、こころ、障がいについての絵本を取り扱っていらっしゃる現役編集者さんです。障がいやバリアフリーを主とした絵本や児童書は、北欧などに比べて日本はとても少ないそうです。しかし、その大切さを日本でも伝えることが大事、と難しい分野に取り組まれています。バリアフリーといっても内容は多岐に渡りますが、「About」「By」「For」とカテゴリー別になっていて分かりやすく表現されていることが、強く印象に残りました。

先入観のない時期にこれらの本に出会うことによって、自分自身のことや他者について自ら考え行動できる素質が生まれていくと思います。そして、違いを受け入れることが当然になれば、いじめや自殺なども少なくなっていく気がします。そういう意味では、子どもだけではなく大人にも必要な本たちだと私は思いました。

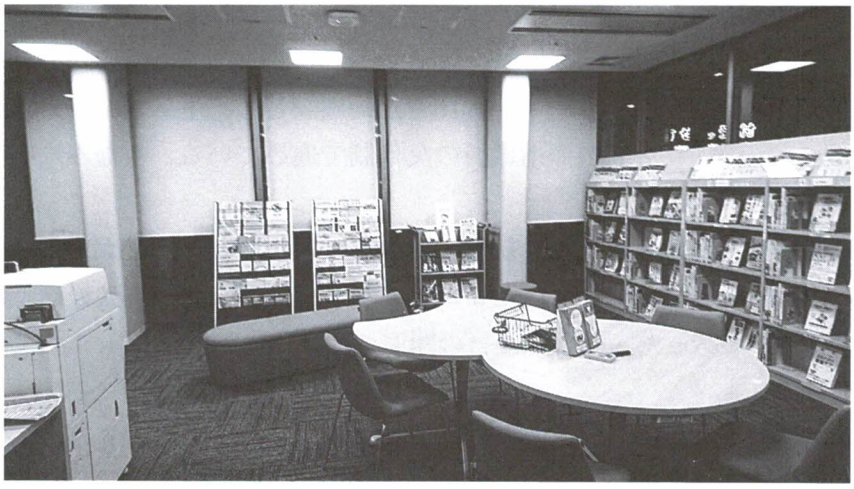
当日は50冊程の絵本が展示されており、実際に手にとって読むことができました。荒木さんもおっしゃっていましたが、児童書は内容が簡潔ですし、やさしいイメージでこわくなく押しつけがましくありません。子どもも大人も楽しめ、値段も安く扱いやすいことも特徴です。今回紹介していただいた本を、当院の患者図書室にも揃えようと考えています。そして、患者さんだけでなく職員にも手にとってもらいたいと思います。

たくさんのいい刺激をいただきました。ありがとうございました。

＜患者図書室訪問＞

からだの図書室「くすのき」（東邦大学大橋病院）訪問記

磯　野　　威



訪問して最初の印象は「本が意外と少ないのでは？」であったが、お話を伺ううちに「蔵書は量を揃えるのではなく、本棚の質に尽きる」ということを痛感した。その支えとなるのが「図書館はまず人材の確保と成長」であり、さらに準備段階での理事者、関係部署との円滑な調整であろう。組織内における日常的な信頼関係醸成の大切さを再認識した見学となった。

2018年10月19日（金）５名で訪問した。閉館時間を待って、担当の牛澤典子さんから開館の経緯、準備から現状、そして今後の課題にいたる説明を受ける。質問を交えながら、2018年８月１日のオープン、その後の活動の様子が具体的に眼前に現れてくる。

東邦大学医学メディアセンター大橋病院図書室は、東京五輪の1964年開設の大橋病院に設置された。そして病院全体の新築を見越して、2010年に「新病院建設における、病院図書室および患者図書室設置の提案」が医学メディアセンター長、大橋病院図書室運営委員会委員長および医学メディアセンター司書主任より、病院長ならびに新病院建設委員会委員長宛に提案されることになる。病院図書室については「病院機能評価統合版評価項目（V6．01．5．1．3)」の「図書室機能が適切に発揮されている」こと、さらに「24時間開館」の実現がうたわれている。一方、患者図書室については「病院機能評価統合版評価項目(V6．02．2．2．2．2)」「患者が疾患についての理解を深めるための支援を行っている」ことが明示された。

2015年に病院図書室の電動書架の老朽化、使い勝手の悪さを背景に「書架入れ替え計画」を作成している。2015年12月に新病院に図書室を移転することが病院より通知される。同時に患者図書室のスペースとして60㎡を要望していたが、共用部分の動線上、エスカレー

タ設置の影響で40㎡に縮小された。

2017年病院図書室の図書、製本雑誌20,000冊の内、14,000冊が大森キャンパスに移管となった。一方、からだの図書室は同年３月に「院内患者図書室運営委員会設置のお願い」を提出。７月には第１回の「患者図書室運営委員会（年３回開催）」が開催され、12月にはからだの図書室の名称が、職員による公募の中から“からだの図書室「くすのき」”と命名された。

病院図書室は、一足早く2018年６月に191㎡で再オープンする。「くすのき」は２か月後の８月１日、39㎡（蔵書200冊、雑誌１タイトル、パンフレット約70種、閲覧・相談対応）でオープンされた。開室は平日９時半から16時。両施設とも、牛澤さんが責任者として運営に当たり、「くすのき」は２名の派遣職員の交代制で進めている。ちなみに病院図書室は３名の体制である。

「くすのき」の概況を開館後２カ月の統計でみると、８月の開館日数は23日、来館者は359人（15.6人／日）となっていて、１日に９～29人が来室している。最大の同時在室人数は７名（閲覧席12席）であった。９月は18日の開室で225人（12.5人／日）１日では６～18人が来室している。

利用者からの質問は多岐にわたる。「くすのき」は目黒川エントランスからエスカレータ２階の動線の要に位置するため、質問には「病院受付の位置」「駐輪場」「無料の水のみ場」「授乳室」「研究棟の位置」「タクシー乗り場」「落とし物」などがあり、病院全体の理解が必須のようである。患者さんからは「こういう本が見られるところがあり助かる」「図書館が気分転換になる」「点字の本は？」「世田谷図書館で探していたものがここにありました」など総じて「くすのき」の評判は好調のようだ。特に「インターネットやプリンターを利用した利用者から『(図書室は）収益部門ではないのに、こういった部分をきちんとそろえるところに東邦大学の姿勢がわかる』」といった、理事者が聞いたら感涙ものの感想もある。

レファレンス事例では「胆と膵臓の図が見たい」「逆さまつげ」「尿失禁体操」などがある。院内外からの広報資料も置いている。また、職員から「ここ使えますか？」「USBからプリントアウトしたい」など病院図書室の機能も求められたという（職員には、もちろん４階にある病院図書室を案内している）。

「くすのき」は準備段階で「患者図書室」設置規約をつくり、その第１条で「心身の健康と疾病について知る権利（患者の知る権利）を尊重し、インフォームドコンセントの理念に基づき、東邦大学医療センター大橋病院に患者図書室をおく」とうたい、さらに第２条では「……大橋病院および地域の患者、あるいはその関係者が、心身の健康と疾病について理解し、また療養生活をより良くするために必要な情報を収集してその利用に供し、本病院の使命達成に貢献することを目的とする」とされている。「患者図書室運営委員会規約」では、委員構成を医師、看護部、薬剤部、栄養部、ソーシャルワーカー室、リハビリテーション部、臨床検査部、病院連携室、総務課、医事課、図書室としている。

さらに「患者図書室情報提供の方針」を作成し、「科学的根拠に基づいたもの」「著作者（作成者）が明らかであるもの」「刊行または公開された日付が明記されており、概ね５年

以内のもの」「読みやすい／使いやすいもの」「商品の宣伝目的でないもの」と明示した。病院図書室の蔵書も必要に応じて提供し、病院内の他部門や病院外の機関の案内を行うことも、あわせて行っている。「くすのき」の室内のデザイン、色調は色を合わせ、いわゆる事務的ではない仕上げとなり、やわらかい雰囲気を醸し出している。また、「感染症対策室」の指導を仰ぎ、除菌クロスの使用など手指消毒を実施している。

牛澤さんによると今後の課題としては、「くすのき」のPR、パンフレットの作成、障害者への配慮（点字資料）、ウェブサイトの準備などがあげられていた。

やはり「図書館は成長する有機体」である。

個人的なことであるが、大橋病院には先年、ちょっとお世話になったことがあった。出来うれば患者としてではなく、「くすのき」の成長を見守り続けたいところである。

牛澤さんには、開設後の多忙の時期にも関わらず、快く５名の見学を受け入れて頂き、そのための資料作成など深くお礼を申し上げます。本稿の大半はその資料によっている。

「くすのき」利用案内

名　　称：東邦大学医療センター大橋病院からだの図書室「くすのき」
住　　所：〒153−8515　東京都目黒区大橋２−22−36
開館時間：月から金曜日９:30から16:00
休 館 日：日・祝日、年末年始（12月29日から１月３日）、創立記念日（６月10日）
サービス：閲覧、レファレンス

全国患者図書サービス連絡会会報投稿規定

1．本会会員（購読会員を含む）は誰でも投稿できます。

2．本会報は、患者図書サービスをめぐるいろいろな話題や問題、そしてこれらと関係する論文、報告、資料などを掲載します。

3．投稿原稿の採否は、役員会で決定します。

4．投稿原稿の長さは問いません。

5．投稿原稿の執筆・提出要領は次の通りです。

① 原則としてWord形式で作成してください。

② 表紙頁には標題、著者名、所属を明記し、更に、主執筆者の所属、郵便番号と住所、電話番号、FAX番号、メールアドレス等を明記してください。

③ 外国人名は原語表記または、適当な日本語表現で表記してください。

④ 原稿に付随する図や、表、写真は図１、表１、写真１などの番号を付け、本文とは別に添付し、本文原稿の欄外にそれぞれの挿入希望位置を指定してください。またそれらは、スキャナを使ってパソコンに取り込んで印刷しますので、なるべく鮮明なものをつけて下さい。原稿も含め、投稿されたものは原則的にお返ししませんので、貴重な写真などはなるべくコピーをとって下さい。どうしても返却を希望されるときは、その旨お伝えください。

⑤ 参考文献の記載様式：

ⅰ）記載順序は出処順として下さい。

ⅱ）逐次刊行物：著者．論文名．誌名．出版年；巻数（号数）：開始頁—最終頁．

ⅲ）単行本：著者．章の見出し．編者名．書名．版表示．（シリーズ名；シリーズ番号）．出版地：出版者；出版年．開始頁—最終頁．

6．著作権は、全国患者図書サービス連絡会に帰属します。転載などを希望する場合は本会事務局に問い合わせて下さい。

7．原稿送付先：info@kanjatosho.jp

（2017.11.18　改訂）

［編集後記］

24巻２号（通巻82号）をお届けします。本号は，去る７月14日に開催した講演会の講演要旨と参加記を掲載しました。ご執筆くださった皆様に感謝します。ただ、原稿をいただいてから発行までに時間を要したため、記事内容に一部不都合な点ができてしまったことをお詫び申しあげます。また、［患者図書室訪問］の第１回目を掲載しました。今後、不定期で連載できればと思っております。

（編集子）

電子ジャーナルホスティングサイト
PierOnline ピアオンライン http://www.pieronline.jp/

南江堂オンライン Journal のご案内

南江堂オンラインJournalは「外科」「内科」「胸部外科」「整形外科」「別冊整形外科」「がん看護」「最新の治療シリーズ」がオンラインで読めるサービスです。

「南江堂オンライン Journal」の特長

- 増刊号や増大号ももれなく閲覧できます。
- 同時アクセスは無制限です。複数人が同時に利用することができます。
- 写真や図も大変鮮明にご覧いただけます。
- 気になった論文をブックマークして、好きな時に簡単に閲覧できます。

バックナンバーが充実しています！

ご契約と同時に、PierOnline に収録されている南江堂オンライン Journal のバックナンバー全てが閲覧可能となります。「外科」、「内科」、「整形外科」、は 2001 年から、「別冊整形外科」は 2000 年から、「胸部外科」は 2004 年から、「がん看護」は 1996 年（創刊号）からご覧いただけます。

内科	2001年～最新号（17年間）
外科	2001年～最新号（17年間）
胸部外科	2004年～最新号（14年間）
整形外科	2001年～最新号（17年間）
別冊整形外科	2000年～最新号（18年間）
がん看護	1996年～最新号（22年間）

お問い合わせ・トライアルのお申込みは下記まで
Content Solutions Company SUNMEDIA 株式会社サンメディア e-Port e-mail : pier@sunmedia.co.jp
本社 〒164-0012 東京都中野区本町 3-10-3 PORT ビル Tel : 03-3299-1575 Fax : 03-3374-1410
大阪オフィス 〒550-0003 大阪市西区京町堀 1-3-3 肥後橋パークビル 4F Tel : 06-6444-7720 Fax : 06-6444-7730

国内最大級の医学文献情報データベース
医中誌Web Ver.5
デモ版 http://demo.jamas.or.jp/

Database 国内発行の医学・歯学・薬学・看護学等の定期刊行物のべ約7,000誌から収集された膨大な医学文献情報をインターネットで検索できます。検索対象は1970年から最新データまで約1,000万件。

Interface 直感的に検索できる検索インターフェースをご用意しています。また、医学用語シソーラスや検索履歴を使い、より適合性の高い検索結果を得ることができます。

Link 医中誌Webから電子ジャーナルや全文PDF等のフルテキストサービスにリンクしている件数は300万件、うち100万件は無料で公開されています(2017年7月現在)。また、図書館システムとのリンクも行えます。

Customize 大学・病院・企業・公共図書館などそれぞれの環境に応じたご利用機関ごとのカスタマイズ、「My医中誌」による個人ごとのカスタマイズが行えます。

法人向け「医中誌Web」
1年間の固定料金制。同時アクセス数2で250,000円（税抜）～

個人向け「医中誌パーソナルWeb」
1ヶ月8時間利用で2,000円（税抜）～

特定非営利活動法人 医学中央雑誌刊行会 http://www.jamas.or.jp/
NPO ICHUSHI
〒168-0072 東京都杉並区高井戸東2-5-18
TEL:03-3334-7575 FAX:03-3334-0497 E-MAIL:info@jamas.or.jp

好評既刊

多様性と出会う学校図書館

一人ひとりの自立を支える合理的配慮へのアプローチ

野口武悟・成松一郎 編著

A５判 184p ／本体：1,800 円＋税／ ISBN978-4-902666-35-9

学校図書館法の改正などもあり、近年、学校図書館という場を「再発見」しようという動きが始まっています。
本書は、学校図書館が、一人ひとりの子どもの特性や思いに寄り添いながら、自立的な生き方をサポートするための基本的な考え方を提案し、それぞれの現場で「合理的配慮」を実践していくためのヒントやアイディアを提供する書籍です。

重版出来

一人ひとりの読書を支える学校図書館

—特別支援教育から見えてくるニーズとサポート

野口武悟・編著　A５判・222p ／本体 2,000 円＋税　ISBN978-4-902666-24-3

特別支援学校、特別支援学級、通常学級に在籍する、特別なニーズのある子どもたちに豊かな読書活動を提供している学校図書館の実践を報告するとともに、ニーズに対応したサポート方法・メディア活用例を解説します。

からだといのちに出会うブックガイド

健康情報棚プロジェクト
＋
からだとこころの発見塾

B５判　244p
本体 2,400 円＋税
ISBN978-4-902666-19-9

図書館員、ジャーナリスト、医療・患者会関係者などがキーワードごとに選んだ「読みたい」「読んでほしい」「棚に揃えたい」絵本・エッセイ・写真集など 179 冊を紹介。

読書工房

〒171-0031　東京都豊島区目白 3-13-18　ウィング目白 102
電話：03-5988-9160　ファックス：03-5988-9161　Eメール：info@d-kobo.jp　http://www.d-kobo.jp/

全国患者図書サービス連絡会会報　ISSN 1344-2937

第24巻　第２号（通巻82号）　2018年12月30日発行

発行所：全国患者図書サービス連絡会（http://kanjatosho.jp/）
〒232－8555　横浜市南区六ツ川２－138－４
神奈川県立こども医療センター　アレルギー科
高増哲也　気付

印刷所：株式会社　中島印刷所
〒232－0026 横浜市南区二葉町４－39